

各地のコーラスグループの方々が施設や養護学校に向いて練習を重ねている。じゃあその目的は、

ええ。このコンサートの目的は、音楽性よりも、手を取り合い、心を結ぶことにあるのですが、はじめの頃、コーラスの皆さんを施設や学校にお連れした時、私が先に入って子どもたちと遊んでも、皆さんはなかなか部屋に入ってくられない。経験がありませんからね。手を取り合うまでに、少なくとも三ヶ月はかかったでしょうか。

練習の成果はいかがですか？

知的障害のある方たちは、一曲覚えるのに一年かかると言われています。それをもう三曲も覚えられました。これは教育の常識では考えられないことなので、おそらく他県の福祉関係の人が聞かれたらびっくりなさいますよ。でも、ほとんど歌えない方もいます。一年練習しても本番でその通りやってくださる保証はありません。でもあなたたちが「あー」と言ってくれるだけで、カスタネットをボンと叩いてくれ



手と手、心と心がふれ合う

いまの福祉の現状改革には腹をくくってやらないとどうにもならない。国連・障害者の十年が過ぎて、いたわりの技術一つ知らないのが日本人です。お金をばらまくだけの福祉がまかり通って、心の福祉が全くない。その心を熊本では皆で少しずつでも身に付けていきたいのです。

今回募集されたボランティアはどんなことをするのですか？

お弁当を配っていたり、車イスを押していたり……。何度か施設に行くと慣れていかなかったり、ありません。当日いきなりできるものはありません。車イスはただ押せばいいというのではなく、坂道を下る時は前に回って引かなくてはならない。思いやりの技術が必要なのです。

そんなことを学ぶ機会もありませんでした。

そうですね。日本では教えてくれませんが、外国では、そちらの方が学問より大切だという考えで、小学校の時から教えますよ。ボランティアの方には私が講習をしようと思っています。それから、ボランティアの方には交通費として二千元を払おうと思っています。あたたかい心に報いるだけの最低

限のことはすべきだと思うのです。



天華リハビリテーションにて

ここで、鈴木館長とボランティアとの出会いは何だったのでしょうか？

私は、終戦を弘前で迎えて、当時、十八才の学生だったのですが、戦争孤児が収容されている施設に「社会奉仕」に行きました。その中に、十八歳の精薄の女の子がいました。その子が六十八人分の洗たくを一日中していたのです。私はその時初めて人間には二通りの生きがいがあると思ったのです。一つは、自分はこのままでいいのかという向上心。もう一つは自分以外の人のために何が出来るかという奉仕の心です。私はいつかその女の子のような生き方をしたいと、青春時代からずっと思っていました。随分まわ

るだけでいいんです。私にはあの子どもが体いっぱい歌っているのが分かるのです。時にはこうした本当の姿を知らず、「二年間練習したってのは嘘じゃないか。障害者は迷惑そうに立っているだけじゃないか。何でやらせるんだ」

「本当の福祉」とはどんなものか。皆さんの力を借りて熊本から全国へ叫びたいのです。

今回一番大変なことは何ですか？

私達、劇場職員が山積する困難に対応できるかということです。食事や移動など。ステージの上で車イス同士がぶつかったりしないか。事故なく終えることができれば、まずは成功です。

出費も相当なものでは？

ざっと見積もっても八千万円はかかるでしょう。私は昭和六十三年に熊本へ来て、すぐに、必要を感じて熊本で得られる全収入と、県内外から私が戴いてきた寄附金を併せて、文化振興基金を設けましたが、今度のコンサートで底を突きそうです。あと三千万円足



みつば学園にて

という心の冷たい人がいるものです。そういう批判はこれまでの経験から見ても必ずあります。私はコンサートの翌日からのそうした無理解も全部引き受け、これと戦い、厚い壁を少しでも突破しようと思っています。

りない。自分で作った文化振興基金に、自分で大変な借金を背負う妙な形になります。(笑)。

出演者とボランティアとスタッフで二千人居ますから、お弁当だけで八百万円は必要です。八百万円あれば「村おこし」が一つできます。お神楽をやられば神楽殿、清和音楽をやられば音楽館が残る。しかし、今回はそういった形となるようなものは何も残りません。

金銭的にも実行の段階でもリスクが大きい。その上に批判も……。そこまでしてコンサートを開く意味は何ですか？

「福祉」ときれいごとを言っても、実際施設に行つてもらえない。特に夜。職員の方々の苦勞は並大抵でないことが分かりますよ。就寝するまで一人でも何人もの世話をしているんです。人手が足りない。いかに「福祉の予算が足りないか」です。一方では、近所に障害者の施設ができることを反対したり、障害児が普通の学校に来ることを拒否したりする現実がある。

り道をしましたが、これからが私の本当の生き方だと思えます。

百人の人に奉仕しても「ありがたう」と言ってもらえるのはたった一人です。その一人に巡り会うことがボランティアのロマンです。

県民の皆さんへ一言どうぞ。

私が今一番恐れていることは、幕があがった時、客席に誰もいないということ。普段、学校や施設、家に閉じこもりがちで障害者の方々にとって、皆さんの拍手は大きな励みとなるで

しょう。当日、劇場へ聞きに来て客席に座つてくださるだけで、それも立派なボランティアなのです。

そして、このコンサートが終わった後も、「障害者と健常者が手をつなぐ心」が続けばと願っています。今、コーラスの皆さん方がずっと続けたいと言つて下さっています。その気持ちが大事なのです。形あるものは残らないけど、心が残ります。その心が今の日本及び日本人に、一番必要とされている心なのではないでしょうか。



愛育学園にて